

告白

The Confession

元大和銀行ニューヨーク支店
井口俊英



告白

The Confession

江苏昆山人文科技学院图书馆
书 章

上海
三
一
書
局
總
經
銷
店

著者略歴（いぐちとしひで）

元大和銀行ニューヨーク支店行員。米国債取引の第一人者だった。12年間にわたる無断取引の全容と970億円にもおよぶ損失の事実を記した告白状を、1995年7月に頭取宛に投函した。同年9月、米司法当局により逮捕される。獄中で、事件について知りうる全てを記すことを決意、拘置所の便箋用紙を1日に2枚、3枚とこつこつ埋め、本書を世に出した。96年12月16日、ニューヨークの連邦地裁で禁固4年、罰金200万ドルの実刑判決を言い渡され、服役中。

告白

1997年1月15日 第1刷

著者 井口俊英

発行者 新井 信

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3-23（〒102）

電話（03）3265-1211

印刷所 凸版印刷

製本所 加藤製本

- ・定価はカバーに表示してあります
- ・万一落丁乱丁の場合は送料当方負担でお取替えいたします。小社営業部宛お送り下さい

Printed in Japan
ISBN4-16-352450-9

告 白 へ 目 次 へ

はじめに

8

1 告白

10

2 謀議

20

3 検証

38

4 逮捕

53

5 公表

68

6 明美

81

7 拘置所

86

8 法廷

96

17	16	15	14	13	12	11	10	9
死	偽装	離婚	裸の王様	横領	無断取引	入行	青春	アメリカン・ドリーム
153	149	144	140	138	129	118	111	101

26	25	24	23	22	21	20	19	18
マリファナ	連銀検査	息子	内部検査	ライアーズ・ポーカー	二人のトレーダー	国税査察	大和トラスト事件	告白準備
244	220	215	201	184	177	172	168	156

27 告白まで

28 大和起訴

29 ラテンキング

30 裏切り

31 構図

32 刑務所の王

33 国際化の真実

34 そして

あとがきにかえて

250

259

274

279

291

299

305

316

320

装帧
写真
A P
鳥巢三津子

告白

はじめに

収監されて数日後、私は、万一自分の身に何かあった時のことを考えて家族のために自分の半生記を綴っておこうと思い、丸くなった鉛筆を窓枠の尖った部分で削りながらこの手記を書き始めました。

当初は特に大和銀行事件に焦点を絞るつもりはなかったのですが、時間の経過に伴い報道される関係者の言い分が、あまりにも無責任かつ不正確であるばかりか、数多くの新聞、雑誌等で誤った事実にもとづいた社説や評論等が目にとまり徐々に考えが変わってきたのです。一九九六年二月、大和銀行が米国連邦検察局との司法取引に応じるに至って、あれだけ世間を騒がせた事件も数多くの疑問を残したまま幕を閉じてしまいました。幸い、事件の中心人物であった私が恐らく最も正確に事件を描写出来るであろうし、もとはといえば自分の誤算に端を発したこの事件の社会的責任をとる意味でも、是非この手記を出版しようと決心しました。

すべてを失って何も守るものがない私には、この期に及んで言い訳をしたり詭弁きべんを弄したりする必要ありません。通常、こういった不祥事が発生すると、関係者は都合のよい言い訳をした

後、責任をとっていわゆる引責辞任をするのが日本の習慣です。しかし、自分の責任の内容を明らかにすることなく辞任するのは責任をとったことになるのでしょうか？ 辞任すれば事実を認める義務から赦免されると考えられているから、日本の不祥事は、最後はうやむやになってしまふケースがほとんどです。中には、ほとぼりが冷めると返り咲く人もおります。

米国では七年前に規制緩和に端を発した金融投機バブルがはじけました。相次いで倒産したS&L（貯蓄貸付組合）の処理のため国民に十兆円以上の負担をさせる代償として、米国では厳しく関係者の刑事責任を追及し、千八百人を起訴したうえ、内千五百人が有罪となりました。こういう背景もあつて銀行の健全性に極度に敏感な米金融当局に対する即時通報義務の履行に二の足を踏んだ大和銀行は、日本では考えられない厳しい処罰をうけました。米国の処罰が妥当だという見方と、行き過ぎだという見方がありますが、私の知りうる全ての情報と資料を提供したこの手記で、もう一度そのところを吟味していただきたいと思います。

私は特定の人物を誹謗（ひぼう）したり、自分の責任を他人に転嫁したりするためでなく、日米関係にまで影響しかねなかつた事件の真相を真正面から描写することで日本の皆様に真実を知っていただくためにこの手記を書きました。

登場人物は公共性の観点によりできる限り実名を使わせていただきましたが、数名については個人の名誉を守るためにも仮名を使用させていただきました。

I 告白

△前略

私はニューヨーク支店配属の井口俊英です。ここに記する事は私の正直な告白です。この事件が、当行に及ぼし得る影響を考えれば、只一人の人間として、この様なことを起こし得る体制が存在したと、自分がその真直中まっただなかに居合わせた不運を呪うばかりです。

事実を先に述べます。

私はニューヨーク支店の米国債取引で約十一億ドルの損失を出しております。損失は当店の投資有価証券をはじめ、顧客より保管銀行（カストディアン）として保護預かりしている米国債を売却して埋め合わせてあります。この様な不祥事を直接頭取殿にご報告することになりましたのは、当行が打つべき手を打つ前に外部に本件が漏れて、当行が一層不利な立場に追い込まれることがなき様、これ以上当行に損失が生じない様配慮したものです。現在のところ、この事実を認知している者は私以外におりません。（中略）

本件を頭取殿にご報告いたしました今、正直申しまして自分の身の振り方をどうしたものか、決め兼ねております。ただ当行がどの様な事後処理をするのか全く判断し兼ねますが、いずれにせよ、本件が外部はもとより内部の人間にも漏れない様、機密を守ることが第一であると考えます。その為にも私は頭取殿よりご指示を頂くまでは、通常のまま勤務する覚悟でおります。幸い、内にも外にも私以外本件を知る者はおられませんし、既に十年以上誰にも気付かれず、秘密を守り通した位ですから、必要な期間、本件が事前に発覚することは、私が居る限りないものと思われ

ます。

本件が米国当局に知れば、昨年あれだけ大事になったにもかかわらず、これだけの事態を察知し得なかったということ、当行の事務管理及び内部検査機能の不徹底さが表面化し、更に對NY連銀への報告に反し、私をそれでも尚、米国債取引の責任者として担当させていたということ、とで当行経営のモラルを問われ、法的にも米国での営業が難しくなることは明らかです。又、大蔵としても母国の監督当局としてNY連銀から下駄をはずけられた上、実調（実地調査―筆者注）まで派遣しておきながら何ら調査をしなかったことで、米国当局に對し面目丸つぶれとなるばかりか、日本当局の監督能力が疑われ、国内においても管理当局としての検査機能にあらためて批判が強まることも懸念されます。その上、本件不祥事の詳細がおおやけになると、年金信託財産の一部を売却して損失を埋め合せていたということ、並びに運用財産の保管管理担当者に米国債の売買も兼任させていたということが信託併営銀行としての信用を根底より揺るがすことにもなりかねません。本件が当行のみの問題で済まないことは充分認識しております。

昨今の邦銀はもとより、日本の金融業界の直面している問題を考えますと、環境が好転するまで秘密を守り通すべきかとも考えましたが、もし本件が外部監査等で発覚するようなことがあれば、当行の存続すら危ぶまれる状態になり得ると懸念され、先述の状況も勘案してこうして頭取殿に直接ご報告することになりました。

従って、今更愛国心を燃やすわけではありませんが、当事者としての私ができることといえば、当行しいては本邦当局が適切な事後処理をするまで、機密を守り通すことであると認識しております。

大和銀行にこのような損害をもたらした事実は今となつては取り返しのつかぬことですが、これ以上事態を悪化させないよう、私は当行に対し最後の奉仕をすべきという考えのもとにこの報告書を書きました▽

一九九五年七月十七日、途中で第三者に開封されずに、間違いなく頭取（藤田彬）の手元に到着することを祈り、一九八六年より何度か出したこの告白状をとうとう発送した。フェデラルエクスプレス（国際宅配便）のメッセンジャーに手渡した瞬間、十二年間胸中奥深く固守してきた私の秘密は、今度こそまぎれもなく海を越え大和銀行の本店に向かうことになった。

この十二年間、大蔵、日銀、国税、ニューヨーク連銀、ニューヨーク州銀行局の検査はもとより、本店検査、米州企画室検査、店内検査等まで、幾度となく秘密発覚の危機にさらされたが、何か目に見えぬものが私を護り続けた。

十二年前精緻をきわめて仕組まれた運命だったのか……。

が、なぜ、私という人間がこの運命をしょわされたのだ。底なし沼に足を取られ、誰にも助けを求められず孤独と絶望の世界でもがき苦しんだ。表面的にはこの世の春を謳歌しているような素振りを見せながら、常に発覚を恐れ一瞬たりとも神経を緩められなかった。あまりもの苦痛に何度か死を選びかけた。

が、自殺という行為は責任をとったことにはならない。それは単なる苦痛よりの逃避であることをある人から教えられた。自分の過ちの責任を何らかの形でとる前に、損失の開示により銀行が破り得るダメージを最小限に止めることが私に残された使命であると信じていた。また、それが自分の身を守ることに必要とも計算した。そして今日とうとう私はこの使命を実行した。少なくともこれでもう大和銀行が破綻することはない。あとは経営陣と大蔵の舵とり次第だ。大和は一九八六年より九年間、その気になれば、一夜で銀行を破綻させうる体制を私の手中に委ねてきた。

損失開示のオプション（選択肢）は大きく分けて告白と発覚とがある。告白は経営幹部に告白する場合と、米検査当局に出頭して自白する場合の二通りがあり、その内容も単に損失の事実のみを告白して、経緯については一切黙秘するか、全貌をありのまま詳細に報告するかの選択がある。また、あくまでも自発的な告白はせず、いずれ発覚するに任せていたら次のような形で発覚していただろう。

・業者との取引決済に問題が生じて発覚。

・業者における多額ポジションが露見して発覚（ポジションとは買付資金を調達するため差し入れている担保債券残高のこと。詳しくは後述する）。

・内部管理事務上での発覚（残高照合作業等）。

・オーディター（検査役）による内部検査での発覚。

・米金融当局による検査中に発覚。

そしてこのような形で発覚していたら、経営陣が事態の全貌を把握する前に、市場に巨額損失の噂が広がり、大和は一夜の内に取付け騒ぎに見舞われて、破綻に追い込まれていたであろう。したがって私の使命は、経営トップに事件の詳細を綴った告白書を提出することと、それまではどんなことがあっても事前に発覚せぬよう、身体を張って秘密を守ることであった。告白のタイミングもことさら重要である。一九九〇年、無敵大蔵艦隊を一息でのみ込んだバブル崩壊の嵐以外に、大和には三光汽船の倒産、大和トラスト巨額損失事件、大和キャピタル巨額損失事件、コスモ証券救済合併といった事件のしかかり、告白のタイミングを見極めることは容易でなかった。しかし今やつとそのタイミングが来たのである。いっこうに回復の兆しを見せない不況の悪化を防ぐ緊急措置という名目で日銀は公定歩合を〇・五パーセントに押えこみ、銀行は貸出金利との鞘でどこも莫大な営業収益を計上したからだ。

告白状を発送してから三日目、頭取より必ず何らかの確認の連絡があると思い、電話が鳴る度に神経を尖らせた。フェデラルエクスプレス社で日本サイドでの領収日付けを確認すると、七月二十一日（金）午後二時〇五分となっている。日本時間であるからもう頭取の手元に届いている